View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

中学生の抑うつと保健室来室の関連について②

On the Relationship Between Junior High School Students' Depression and the Health Office Visit②

杉浦　歩美・土田　満*

静岡県公立学校
**愛知みずほ大学大学院*

Ayumi SUGIURA and Mitsuru TSUCHIDA*

Shizuoka Public School
**The Granduate Center of Human Sciences,Aichi Mizuho Collage*

キーワード　：　中学生; 保健室;　DSRS-C.
Keyword　：　middle school students; school infirmary; DSRS-C.

Ⅰ　はじめに

学校現場においてもメンタルヘルスに関する問題は社会的関心が向けられている。子どものうつ病についての疫学調査[1]では，抑うつ傾向を示している小学生は7.8%・中学生は22.8%と高い割合で存在する報告もみられる。

子どもは、抑うつ感をうまく言語化できず、痛や腹痛などの身体症状に出やすい傾向[2]にあり、抑うつ感を持つ生徒は抑うつ感を持たない生徒に比べて保健室利用回数が多いことが推測される。また、抑うつ症状の中でも、より強く出ている症状の傾向がわかれば、効果的な対応ができると考え、本研究では抑うつ症状の内容と保健室来室頻度の関連について検討を行った。

Ⅱ　研究方法

1．調査対象

2015年11月にA県の公立中学校1～3年に在籍し、調査当日に授業に出席していた生徒、男女568名を調査対象とした。

2．　調査方法と調査期間

学級担任が教室で調査票を配布し、自記式アンケート調査を実施した。調査期間は2015年11月である。

保健室来室数は1年間(2015年4月～2016年3月)の保健室来室者の記録を用いた。

3．　調査内容

アンケート調査票は、以下の2項目で構成した。

1)　対象者の基本属性

学年、性別など。

2)　生徒の抑うつ傾向に関する項目（18問）

生徒の抑うつ傾向の測定には、Birlesonによる子ども用抑うつ自己評価尺度(Depression Self-Rating Scale for Children:DSRS-C)を日本語版に改定した村田ら[3]のDSRS-Cを使用した。回答は、最近1週間の状態を尋ね、各項目において抑うつ傾向が高くなると考えられる方から順に2点、1点、0点と採点し、カットオフポイントを16点とした。

４． 分析方法

統計解析にはIBM SPSS Statistics ver. 24. 0を使用した。

５． 倫理的配慮

調査対象者の在籍する学級担任の指示のもと、学級単位で授業時間を用い、集団で実施した。学級担任が質問紙を配布し、学級担任の指示のもとで一斉に回答を求めた。調査用紙に、得られたアンケート結果は個人を特定できないように統計処理を行う旨を明記した。また、実施の際には、調査用紙の内容に加え、実施方法と、本調査は普段の生活での考え方や気持ちについて尋ねるものであること、回答は成績に一切関係しないこと､回答に正しい答えや間違った答えはないこと、回答は任意であることが、学級担任より口頭で説明された。

Ⅲ 結果

1．DSRS-Cの因子分析

1）DSRS-Cの因子分析

DSRS-Cを主因子法・プロマックス回転により因子分析を行った結果を表1に示した。固有値の推移と解釈の可能性から2因子に分類した｡各因子のCronbachのα係数は0. 75～0. 79であり,累積寄与率は44. 22%であった。

表1．DSRS-Cの因子分析

項　目	2因子指定	
	因子1	因子2
活動性及び楽しみの減退（α＝.79）		
⑦元気いっぱいだ（じゃない）※	0.71	-0.07
⑫いつものように何をしていても楽しい（くない）※	0.69	-0.01
①楽しみにしていることがたくさんある（ない）※	0.62	-0.07
⑧食事が楽しい（くない）※	0.61	-0.07
⑬家族と話すのが好きだ（じゃない）※	0.50	-0.04
⑯落ち込んでいてもすぐに元気になれる（ない）※	0.49	0.17
④遊びに出かけるのが好きだ（じゃない）※	0.48	-0.14
⑪やろうと思ったことがうまくできる(ない)※	0.47	0.04
②とても良く眠れる（ない）※	0.37	0.21
⑨いじめられても自分で「いやだ」と言える（ない）※	0.26	0.15
抑うつ気分（α＝.75）		
③泣きたいような気がする。	-0.20	0.74
⑰とても悲しい気がする。	0.02	0.72
⑤逃げ出したいような気がする。	0.05	0.63
⑮独りぼっちの気がする。	0.14	0.52
⑩生きていても仕方がないと思う。	0.20	0.46
⑥おなかが痛くなることがよくある。	-0.11	0.43
⑭こわい夢を見る。	-0.05	0.37
※逆転項目　因子	1	2
1	1	0.442
2	0.442	1

第1因子は，⑦「元気いっぱいだ（ではない）」，⑫「いつものように何をしていても楽しい（くない）」などの10項目からなることから「活動性及び楽しみの減退」と命名した。第2因子は，③「泣きたいような気がする」，⑰「とても悲しい気がする」などの7項目からなることから「抑うつ気分」と命名した。解釈の問題から⑳「とても退屈な気がする」は除外した。

2．保健室来室頻度とDSRS-C下位尺度因子の関係

1） 全校の比較

1年間の生徒の保健室への来室した頻度について「来室なし群（0回）」「たまに来室群（1～5回）」「よく来室群（6回以上）」に群分けをした。

保健室来室頻度とDSRS-C下位尺度因子の関係（全校）を表10に示した。下位尺度の「活動性及び楽しみの減退」において、来室群間の下位尺度の得点に有意差が認められ、「よく来室群」の得点が「来室なし群」「たまに来室群」より有意に高かった。「抑うつ気分」においても、来室群間の下位尺度の得点に有意差が認められ､「よく来室群」の得点が「たまに来室群」より、「たまに来室群」の得点が「来室なし群」より有意に高かった。

表2．保健室来室頻度とDSRS-C下位尺度因子の関係（全校）

(M±SD)

下位尺度	n	来室回数群	得点	有意差	多重比較
活動性及び楽しみの減退	222	1.来室なし	7.3±3.5		
	241	2.たまに来室	7.3±3.8	*	3>1,2
	105	3.よく来室	8.4±4.3		
抑うつ気分	222	1.来室なし	3.1±2.3		
	241	2.たまに来室	3.8±2.8	**	3>2>1
	105	3.よく来室	5.1±2.7		

* p<0.05, **p<0.01

2）学年別の比較

保健室来室頻度とDSRS-C下位尺度因子の関係（学年別）を表11に示した。1年生では下位尺度の「活動性及び楽しみの減退」において、来室群間の下位尺度の得点に有意差が認められなかった。「抑うつ気分」においては、来室群間の下位尺度の得点に有意差が認められ、「よく来室群」の得点が「来室なし群」「たまに来室群」より､「たまに来室群」の得点が「来室なし群」より有意に高かった。2年生でも、1年生と同様に「活動性及び楽しみの減退」において来室群間の下位尺度の得点に有意差は認められなかったが、「抑うつ気分」においては、来室群の下位尺度の得点に有意差が認め

られ、「よく来室群」の得点が「来室なし群」より有意に高かった。3 年生では、「活動性及び楽しみの減退」及び「抑うつ気分」に来室群間の下位尺度の得点に有意差が認められ、いずれも「よく来室群」の得点が「来室なし群」「たまに来室群」より有意に高かった。

表 3. 保健室来室頻度と DSRS-C 下位尺度因子の関係（学年別）

(M±SD)

下位尺度	来室回数群	1年 n	1年 得点	1年 有意差	1年 多重比較
活動性及び楽しみの減退	1.来室なし	56	6.3±3.1		
	2.たまに来室	86	6.7±3.6	n.s	
	3.よく来室	39	6.7±4.3		
抑うつ気分	1.来室なし	56	2.4±2.0		
	2.たまに来室	86	3.5±2.4	**	3>2>1
	3.よく来室	39	4.7±2.7		

下位尺度	来室回数群	2年 n	2年 得点	2年 有意差	2年 多重比較
活動性及び楽しみの減退	1.来室なし	74	8.3±3.5		
	2.たまに来室	79	7.5±4.1	n.s	
	3.よく来室	36	8.5±3.7		
抑うつ気分	1.来室なし	74	3.3±2.5		
	2.たまに来室	79	4.0±3.0	*	3>1
	3.よく来室	36	4.8±2.6		

下位尺度	来室回数群	3年 n	3年 得点	3年 有意差	3年 多重比較
活動性及び楽しみの減退	1.来室なし	92	7.0±3.6		
	2.たまに来室	77	7.8±3.5	**	3>1,2
	3.よく来室	29	10.7±4.2		
抑うつ気分	1.来室なし	92	3.2±2.3		
	2.たまに来室	76	3.8±2.9	**	3>1,2
	3.よく来室	29	5.6±2.8		

n.s:有意差なし, * p<0.05, **p<0.01

3）性別の比較

保健室来室頻度と DSRS-C 下位尺度因子との関係（性別）を表 4 示した。男子では下位尺度の「活動性及び楽しみの減退」において、来室群間の下位尺度の得点に有意差は認められなかった。「抑うつ気分」においては、来室群間の下位尺度の得点に有意差が認められ、「たまに来室群」と「よく来室群」の下位尺度の得点が「来室なし群」より有意に高かった。一方、女子では、「活動性及び楽しみの減退」において、来室群間の下位尺度の得点に有意差が認められ、「よく来室群」が「たまに来室群」より有意に得点が高かった。「抑うつ気分」においても、来室群間の下位尺度の得点に有意差が認められ、「よく来室群」の得点が「来室なし群」「たまに来室群」より有意に高かった。

表 4. 保健室来室頻度と DSRS-C 下位尺度因子の関係（男女別）

(M±SD)

下位尺度	来室回数群	男子 n	男子 得点	男子 有意差	男子 多重比較
活動性及び楽しみの減退	1. 来室なし	131	7.1±3.3		
	2. たまに来室	129	7.3±3.8	n.s	
	3. よく来室	42	7.5±4.5		
抑うつ気分	1. 来室なし	131	2.6±2.2		
	2. たまに来室	129	3.6±2.7	**	2.3>1
	3. よく来室	42	4.0±2.5		

下位尺度	来室回数群	女子 n	女子 得点	女子 有意差	女子 多重比較
活動性及び楽しみの減退	1. 来室なし	91	7.5±3.7		
	2. たまに来室	112	7.4±3.7	*	3>2
	3. よく来室	63	9.0±4.1		
抑うつ気分	1. 来室なし	92	3.7±2.3		
	2. たまに来室	112	3.9±2.9	**	3>1,2
	3. よく来室	63	5.7±2.9		

n.s:有意差なし, * p<0.05, **p<0.01

Ⅳ　考察

保健室来室頻度と DSRS-C 下位尺度因子の関係

DSRS-C の因子分析により抽出された 2 つの下位尺度は、ポジティブな言葉づかいの項目で構成される「活動性および楽しみの減退」と、ネガティブな言葉づかいの項目で構成される「抑うつ気分」である。これは佐藤ら[4]や永井[5]の結果とほぼ同様のものであった。

2 つの下位尺度と保健室来室回数の関連においては、保健室によく来室するものほど「活動性及び楽しみの減退」と「抑うつ気分」の両方の得点が，有意に高いことが認められた。しかし、ポジティブな面の抑制である「活動性及び楽しみの減退」よりもネガティブな面の促進である「抑うつ気分」により大きな差が見られた。そのため、保健室では、ネガティブな気持ちをケアするカウンセリングマインドを大切にしたアプローチが大切であることが示唆される。

Ⅴ　結論

DSRS-C の因子分析により抽出された 2 つの下位尺度と保健室来室回数の関連においては、保健室によ

く来室するものほど「活動性及び楽しみの減退」と「抑うつ気分」の両方の得点が、有意に高いことが認められた。

引用・参考文献

1) 傳田健三：子どものうつ病　母子保健情報　第 55 号 2007
2) 高橋三郎　訳：DSM-III-R 精神障害の診断・統計マニュアル　1988
3) 村田豊久，清水亜紀，森陽次郎他：学校における子どものうつ病−Birleson の小児期うつ病スケールからの検討−. 最新精神医学, 1 , 131-138. 1996
4) 佐藤寛・新井邦二郎：子ども用抑うつ自己評価尺度（DSRS）の因子モデルの検討　筑波大学心理学研究 14, 85−91
5) 永井智：中学生における児童用抑うつ自己評価尺度（DSRS）の因子モデル及び標準　データの検討　2008